

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム (2000) 創刊号:4.

新しい学術雑誌の刊行を喜ぶ

久保良彦

新しい学術雑誌の刊行を喜ぶ

旭川医科大学長 久保良彦

このたび学術雑誌「旭川医科大学研究フォーラム」が刊行される運びとなり、まことにご同慶にたえません。

すでに本学は学術雑誌として、一般教育を担当する教官の執筆になる論文を収載してきた「旭川医科大学紀要」を持っておりました。しかし、平成8年より看護学科が併設されたこともあり、対象範囲をより拡大した学術雑誌の発刊が次第に待ち望まれるようになりました。

一方、停まるところを知らない医学の研究・医療技術の進歩は、学内においてもますます各部局の専門分化を深めているように思われます。同じ大学に居ながら“隣は何をする人ぞ”といった濃密な交流不足の気配は、大学の個性化、医学・看護学教育の充実あるいは運営機能の効率化など、これからの大学改革の推進に少なからぬ懸念を抱かせるものです。そこで、折りから教授会メンバーの若返りが進行していることもあって、助教授・講師・助手など若手教官も含め、各自の“得意ワザ”を披露していただいて周知を図ること、あるいは国の内外から講演者を招き、医学あるいは周辺領域の理解を深めることなどを目的として、“旭川医科大学フォーラム”が企画されました。本学教職員、学生はもとより、医師会会員、地域の医療技術者を対象としたもので、このような企画によって、学内の相互交流の促進、研究の賦活、学生の学習意欲を刺激すること、あるいは地域社会との連帯を深めることなどに大いに役に立って欲しいという願いが込められております。

こうして、昨年3月から始められた“フォーラム”では、採り上げられる領域の最先端の知見を含む総説を、学生が理解できるレベルでという大変難しい注文で講演が依頼されているにも拘わらず、各講師により大変明快で中身の濃い充実した講演が続けられてきました。

折角のよい講演を右から左への聞き流しでは教育効果が薄く余りに勿体ないことで、是非活字にして残したいというのが、この学術雑誌刊行のいま一つの大きなモチベーションでありました。

情報通信技術（IT）の時代といわれる新しい世紀を目の前にして、すでに情報化をいう大変忙しい世の中になっております。とくにわが国ではインターネットの発達で世の中のさまざまな仕組みが根源からゆさぶられ、変革が求められていることは衆知のとおりであります。医学・医療の領域も例外ではありません。医学教育・研究あるいは診療といったあらゆる分野で、世界標準という物差しを使い物事を判断する必要に迫られている現状といえます。

ただ溢れるような情報量の増大はややもするとその軽重の見分けを難しくし、あるいは留め置かなければならない事柄まで一緒にうたかたのように消え去らせてしまうことも少なくありません。医学医療関連の学術雑誌が増えるばかりの昨今、何をいまさらというご意見がなきにしもあらずですが、むしろ、こういう時代だからこそ本学独自の個性ある学術雑誌の発行が生きてくるのではないかと考えます。

折りしも国立大学の独立行政法人化が論議されております。どのような設置形態がとられるにせよ、今後社会に開かれた大学としてその活動の実態を積極的に公表する一つのメディアを持つ意義は少なくありません。

査読制度をもつ全学規模の学術雑誌の新しい門出を実現していただいた片桐一副学長を委員長とする「旭川医科大学研究フォーラム」編集委員会のご苦心とご努力に心から敬意と謝意を表したいと思います。

学術雑誌の“いのち”はその内容にあることは申すまでもありません。本学教職員ならびに同窓会諸兄姉には「旭川医科大学研究フォーラム」を学術雑誌として立派に育てていただきたく、厳しい評価と力強いご支援・ご協力を特にお願い申し上げます。